

先月までの為替相場のレビューと、今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2014/08/01

ドル高が最大のテーマとなるか

通貨ペア	基調		ページ数
ユーロ/円	➡	難解な値動きに 予想レンジ: 134.000 ~ 140.000円	2 - 3
ユーロ/ドル	➡	ドル高への期待 予想レンジ: 1.31000 ~ 1.36500 ドル	4 - 5
ポンド/円	➡	英国の利上げ期待は再度高まるか 予想レンジ: 171.000 ~ 176.000 円	6 - 7
ポンド/ドル	➡	英米両国の「早期利上げ期待」比べ 予想レンジ: 1.66000 ~ 1.73000 ドル	8 - 9

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします

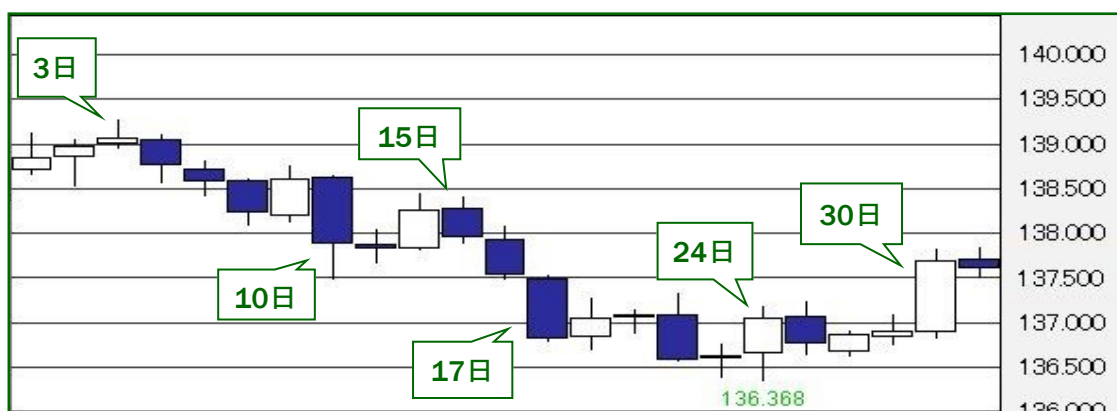


本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2014 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

ユーロ/円 7月の推移

7月のユーロ/円相場は、136.368～139.271円のレンジで推移し、月間の終値ベースでは、約0.8%の下落(ユーロ安・円高)となった。上旬3日に139.271円まで上昇したものの、ポルトガルの金融不安再燃や、ウクライナを巡る欧露関係の悪化など、ユーロ圏経済の重荷となり得る材料が目立ち、24日には約5カ月半ぶりの安値となる136.368円を付けた。その後は、ドルの上昇がユーロを押し下げる一方で、対ドルを中心に円安も進んだため方向感を欠いたが、30日には円売りの勢いが勝り、137.80円台へと値を戻した。月の後半は、ユーロそのものよりも、ドルや円の動向に左右された面が強かったと言えるだろう。



四本値	
OPEN	138.729
HIGH	139.271
LOW	136.368
CLOSE	137.626

3日	米6月雇用統計の発表と同時に欧州中銀(ECB)理事会後の定例総裁会見が始まり、円とユーロが両方売られる中で139.271円の高値を付けた後上げ幅を縮めるなど乱高下した。米雇用統計の好結果と、ドラギECB総裁の発言(「ユーロ圏の経済へのリスクは引き続き下向き」「政策金利は長期に渡り現行水準に留まる」「為替水準は政策目標ではないが、インフレ見通しにとって重要」など)を受けてユーロが売られた一方、米雇用統計の好結果が株高を誘ったため円売りも活発化した。
10日	ポルトガル大手銀行エスピリト・サントの親会社が短期債務の返済を見送った事が伝わると、エスピリト・サント銀行株主導でポルトガル株式市場が全面安となった上に、同国10年債利回りが4%目前まで(前日の3.6%台から)上昇。ポルトガル金融システムへの不安が再燃してユーロ売りが活発化すると138円を割り込んだ。
15日	英6月消費者物価指数を受けてユーロ/ポンド相場でもユーロ売り・ポンド買いが強まった事に加え、独7月ZEW景況感調査が27.1と予想(28.2)より弱い結果となった事から、ユーロ/円は137.984円まで値を下げた。その後、一旦値を戻したものの「ポルトガルのエスピリト・サント銀行の関連会社であるリオフォルテはルクセンブルクで債権者保護手続きの申請を準備している」との報道を受けて再び軟化。米連邦準備制度理事会(FRB)のイエレン議長が「労働市場の改善が予想より速い場合、想定より早期に利上げを決定する可能性がある」と発言した事を受けてユーロ安・ドル高に振れるとユーロ/円も137.896円まで連れ安した。
17日	「マレーシア航空機がウクライナ東部上空で墜落された」との報道をきっかけにリスク回避の動きが強まり137円を割り込んだ。さらに、イスラエル首相府がガザ地区への侵攻開始を明らかにした事を受けてNYダウ平均が17000ドルを割り込むなどリスク回避の動きに拍車がかかると136.809円まで下値を切り下げた。
24日	ウクライナ問題を巡り、欧米によるロシアへの制裁強化が確実視される中、ユーロ売りが先行すると136.368円の安値を付けた。しかし、独7月PMI製造業・速報が52.9、ユーロ圏7月PMI製造業・速報も51.9と、いずれも予想(51.9、51.7)を上回ると、136.979円まで反発。
30日	米4-6月期国内総生産(GDP)が予想を大きく上回った事を受けてドル/円が上昇すると、ユーロ/円も連れ高したが、同時にユーロ/ドルが下落したため伸び悩んだ。しかし、その後の米連邦公開市場委員会(FOMC)で低金利の長期化を示唆した事を好感してNYダウ平均が下げ幅を縮小すると、ドルと円が売られユーロが買われたため137.832円まで上昇した。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

EUR/JPY

日経平均

OPEN	15179.64
HIGH	15759.66
LOW	15101.49
CLOSE	15620.77

独 D A X

OPEN	9853.74
HIGH	10032.28
LOW	9395.35
CLOSE	9407.48

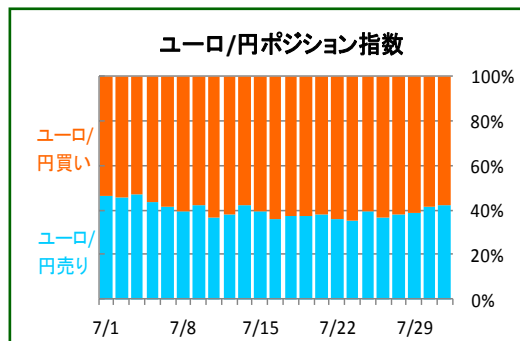
独2年債利回

OPEN	0.030%
HIGH	0.039%
LOW	0.010%
CLOSE	0.025%

独10年債利回

OPEN	1.252%
HIGH	1.314%
LOW	1.109%
CLOSE	1.155%

7月のポジション動向



今月の注目ポイント

月間指標カレンダー(外部リンク)

- ・ECB金融政策発表(7日)
- ・日銀金融政策決定会合(7-8日)
- ・独6月貿易収支/経常収支(8日)
- ・独8月ZEW景況感調査(12日)
- ・日4-6月期GDP・一次速報(13日)
- ・ユーロ圏4-6月期GDP(14日)
- ・独8月PMI製造業・速報(21日)
- ・独8月IFO景況指数(25日)
- ・独8月雇用統計(28日)
- ・独8月消費者物価指数・速報(28日)
- ・ウクライナ・イスラエル情勢
- ・主要国株価、国際商品価格

今月の見通し

8月のユーロ/円は、ドル高の影響がどこまで広がるかが焦点となろう。7月終盤のドル高局面では、ユーロ/ドルの下落とドル/円の上昇の狭間で神経質に揺れ動いた。米国の早期利上げ期待が再燃し始めており、米量的緩和の終了と出口戦略への示唆が見込まれる秋口にかけて、ドル高地合いが続くと見られるため、当面のユーロ/円は難解な値動きが続く事になりそうだ。米国の早期利上げ期待を背景としたドル高地合いであれば、円安を誘発しやすいため、ユーロ/円の上昇に繋がる事も考えられるが、ウクライナやイスラエルなどの地政学リスクの高まりによるドル高はユーロ/円の下落に繋がりがやすい。同じドル高でも背景の違いによってユーロ/円の反応が異なる可能性があるため、市場のムードを嗅ぎ分ける事が必要となろう。

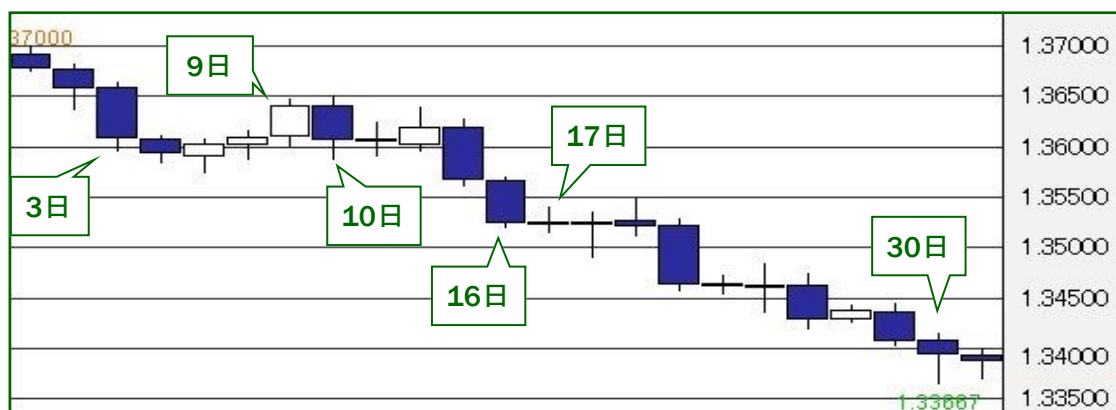
材料面では、ECB金融政策発表の他、4-6月期ユーロ圏GDPや8月独PMI製造業(及びサービス業)などのユーロ圏の景気指標に注目しておきたい。また日本では、消費増税後の4-6月期GDPの結果を受けて追加緩和への期待がどのように変化するか注目される。(神田)

(予想レンジ: 134.000~140.000円)

ユーロ/ドル 7月の推移

EUR/USD

7月のユーロ/ドル相場は1.33667～1.37000ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約2.2%の下落(ユーロ安・ドル高)となった。月初1日に付けた1.37000ドルを高値に、ほぼ右肩下がりの軟調推移となり、30日には約8カ月半ぶりの安値となる1.33667ドルまで下落した。ドラギ欧州中銀(ECB)総裁以下ECBメンバーによるユーロ高牽制や、ポルトガル金融不安の再燃、さらにはウクライナ問題を巡る欧州とロシアの対立など、ユーロの弱みが続出した事に加え、下旬には米国景気の足取りの強さを示すGDP統計がドルの強みとなり、ユーロ安・ドル高が進んだ。また、ECBが6月にマイナス預金金利を含む緩和パッケージを決めたのに対し、米連邦準備制度理事会(FRB)が着々と量的緩和を縮小させて、来年の利上げに向けた地固めを進めつつあるという金融政策のコントラストが素直にユーロ安・ドル高に寄与したとも考えられる。



四本値

OPEN	1.36918
HIGH	1.37000
LOW	1.33667
CLOSE	1.33889

3日	米6月雇用統計で失業率が2008年9月以来となる6.1%に低下、非農業部門雇用者数が28.8万人増と市場予想(6.3%、21.5万人増)より良好な結果となった事を受けてドル買いが活発化。また、同時刻に始まったドラギECB総裁の定例会見で「ユーロ圏の経済へのリスクは引き続き下向き」「政策金利は長期に渡り現行水準に留まる」為替水準は政策目標ではないが、インフレ見通しにとって重要などと発言した事を受けてユーロが売られた。このため、ユーロ/ドルは一時1.36ドルを割り込んで下落した。
9日	ベルギー中銀のクーン総裁(ECB理事会メンバー)が「ユーロが非常に強いというのは誤り。金融危機前に1.60ドルに向かっていった事を思い出すべき」と発言した事を受けてユーロが上昇。その後、米連邦公開市場委員会(FOMC)議事録で「見通しが維持されれば、量的緩和は10月に150億ドル縮小して終了」との道筋が示されるとドル買い(ユーロ売り)に傾く場面もあったが、議事録には「経済拡大の支援のための金融政策が引き続き必要」「多くのメンバーは利上げ時かその後のタイミングの再投資終了に賛成」などとハト派的な記載も目立ったため、ドルが売り戻されて1.36482ドルまで反発した。
10日	ポルトガル大手銀行エスピリト・サントの親会社が短期債務の返済を見送った事が伝わると、エスピリト・サント銀行株主導でポルトガル株式市場が全面安となった上に、同国10年債利回りが4%目前まで(前日の3.6%台から)上昇。金融システムへの不安が再燃してユーロ売りが活発化すると1.35890ドルまで下落した。
16日	欧州連合(EU)首脳会議の声明草案として「ロシアへの制裁を拡大する」と伝わると、欧州経済への影響を懸念したユーロ売りが強まった。
17日	「マレーシア航空機がウクライナ東部上空で撃墜された」との報道やイスラエル首相府が、ガザ地区への地上侵攻を開始した事を明らかにした事を受けてユーロが売られる場面もあったが、リスク回避の動きから米国債が買われた(長期金利が低下した)ためドル売りも流入。ユーロ/ドルは1.35ドル台前半で乱高下した。
30日	米4-6月期国内総生産(GDP)が前期比年率+4.0%と予想(+3.0%)を大きく上回り、1-3月期の確報値が-2.9%から-2.1%に上方修正された事を受けてドル買い・ユーロ売りが活発化し、1.33667ドルの安値を付けた。その後発表になった米連邦公開市場委員会(FOMC)声明では、「2%を下回るインフレ率が続く可能性は幾分低下した」「失業率は一段と低下しており、労働市場の状況は改善した」などと米経済に楽観的な見方を示した一方で、「労働市場の資源活用がなお極端に低い状態にある」などとして低金利の長期化を示唆したため一時1.3400ドル台を回復するなどドルが売り戻された。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

EUR/USD

NYダウ平均

OPEN	16828.53
HIGH	17151.56
LOW	16563.30
CLOSE	16563.30

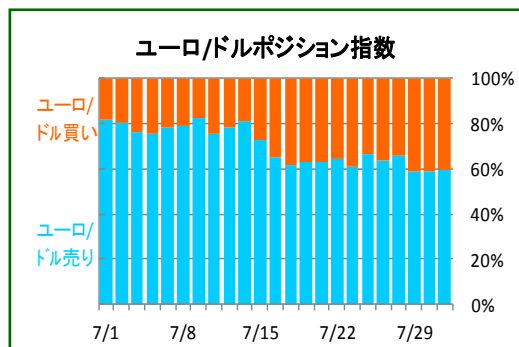
独10年債利回

OPEN	1.252%
HIGH	1.314%
LOW	1.109%
CLOSE	1.155%

米10年債利回

OPEN	2.5268%
HIGH	2.6794%
LOW	2.4441%
CLOSE	2.5578%

7月のポジション動向



今月の注目ポイント

月間指標カレンダー(外部リンク)

- ・米7月雇用統計(1日)
- ・ECB金融政策発表(7日)
- ・独8月ZEW景況感調査(12日)
- ・米7月小売売上高(13日)
- ・ユーロ圏4-6月期GDP(14日)
- ・米7月住宅着工件数(19日)
- ・独8月PMI製造業・速報(21日)
- ・FOMC議事録(20日)
- ・米ジャクソンホール会合(21-23日)
- ・独8月IFO景況指数(25日)
- ・独8月消費者物価指数速報(28日)
- ・米4-6月期米GDP・速報値(30日)
- ・米長期金利
- ・主要国株価
- ・イラク・ウクライナ情勢

今月の見通し

8月のユーロ/ドル相場にとって最大の焦点は、ドルの動きと言えるだろう。7月後半に再燃したドル高基調は、秋口の量的緩和終了と来年半ばの利上げ開始を睨んだ動きであり、今後数カ月に渡り「ドル高」が市場の最大テーマとなる可能性があるため要注目だ。7月米雇用統計や7月米小売売上高などの結果が利上げ観測を後押しする内容となれば、ユーロ安・ドル高が進みやすくなるだろう。また、米連邦公開市場委員会(FOMC)議事録や米連邦準備制度理事会(FRB)のイエレン議長が講演を行うジャクソンホール会合などの米金融政策イベントは確実に押さえておきたいポイントだ。

もっとも、こうしたドル高への期待が梯子を外される展開となれば、短期筋のユーロ売り・ドル買いポジションが急速に巻き戻される可能性もある。経済指標の悪化やイエレンFRB議長のハト派発言には注意が必要だろう。欧州中銀(ECB)が6月に包括緩和を導入したばかりである事や、7月のユーロ下落により、ECBメンバーによるユーロ高牽制が入りにくいなど、ユーロ圏からはユーロ安(ドル高)への追撃材料を期待しにくいだけに、予想外にドルが下落する展開となれば、ユーロ/ドルの上昇は比較的大きなものになるかもしれない。(神田)

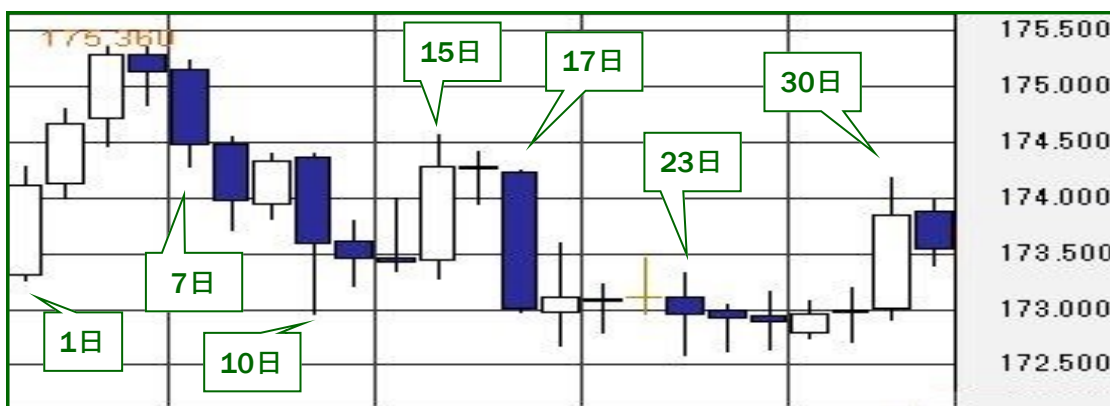
(予想レンジ: 1.31000~1.36500ドル)

ポンド/円 7月の推移

GBP/JPY

7月のポンド/円相場は172.606～175.360円のレンジで推移。月間の終値ベースではほとんど横ばいでの推移となった。

月初は英指標の好結果を受けたポンド高や、米6月雇用統計の好結果を背景とするドル/円の上昇などが追い風となり、175.360円まで値を伸ばすも、その後はポルトガルの金融不安や、ウクライナ上空でのマレーシア航空機撃墜などのリスク要因を受けて上げ幅を縮小。英国の材料で動く場面も散見されたが、英国の早期利上げ期待に繋がらなかったため、値幅はさほど出なかった。



四本値

OPEN	173.314
HIGH	175.360
LOW	172.606
CLOSE	173.553

1日	英6月PMI製造業が57.5と市場予想(56.8)を大幅に上回ったことを受け、ポンド/円は上昇した。
7日	日銀の名古屋支店長の「現状程度の為替水準が心地良いとの声が圧倒的」「円安を望む声は聞かれない」などの発言が伝わると、全般的に円高が進み、ポンド/円も値を下げた。
10日	ポルトガルの大手銀行であるエスピリト・サント銀行の親会社が短期債務返済を見送った。これを嫌気してリスク回避の動きが強まり、ポンド/円は下落した。
15日	英6月消費者物価指数が前年比+1.9%と市場予想(+1.6%)を大きく上回ると、ポンド/円は上昇した。
17日	ウクライナ上空でマレーシア航空機が撃墜された(ウクライナ親ロシア派が行ったと見られる)事で米国および欧州対ロシアの対立が再度懸念され、リスク回避ムードが拡大。この中でポンド/円は失速した。
23日	英中銀(BOE)の金融政策委員会(MPC)議事録発表前に、「利上げに賛成したメンバーがいたのでは?」との観測からポンド買いが先行する様子も見られたが、発表された議事録では全会一致で金融政策が据え置かれた事が明らかになると、ポンドは失速した。ただし、その後地政学的リスクの一服感から主要国株価が堅調に推移していたため、下げ幅を縮小した。
30日	英6月住宅ローン承認件数が6.72万件と予想(6.3万件)を上回った事でポンド高が進行。さらに、米4-6月期国内総生産(GDP)速報が前期比年率+4.0%と市場予想(+3.0%)を大きく上回った事などを受けてドル/円が上昇した事に連れて174.184円まで上昇した。

GBP/JPY

日経平均

OPEN	15179.64
HIGH	15759.66
LOW	15101.49
CLOSE	15620.77

FTSE100

OPEN	6743.94
HIGH	6875.31
LOW	6643.62
CLOSE	6730.11

英2年債利回

OPEN	0.8710%
HIGH	0.9440%
LOW	0.8040%
CLOSE	0.8400%

英10年債利

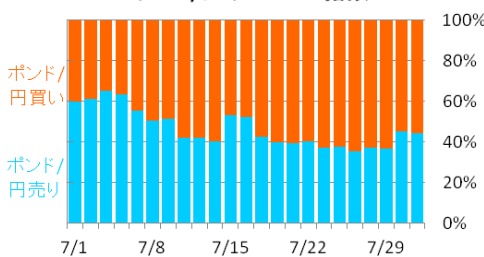
OPEN	2.6770%
HIGH	2.7910%
LOW	2.5280%
CLOSE	2.6020%

7月のポジション動向

今月の注目ポイント

月間指標カレンダー(外部リンク)

ポンド/円ポジション指数



- ・BOE金融政策発表(7日)
- ・英7月雇用統計(13日)
- ・日4-6月期GDP・一次速報(13日)
- ・英BOE四半期インフレ報告(13日)
- ・英第2四半期GDP・改定値(15日)
- ・英7月消費者物価指数(19日)
- ・BOE議事録(20日)
- ・英利上げ時期を巡る要人発言
- ・イスラエル情勢
- ・ウクライナ情勢
- ・日本の追加緩和に関する要人発言

今月の見通し

7月の英国では経済指標も目立って良い結果のものが続かず、早期利上げ期待が大きく盛り上がるような場面が無かった。そのため、主体的に大きく動く場面は6月に比べるとかなり少なかったと言える。

とはいえ、引き続き材料次第では英国の早期の利上げを織り込もうとする動きは台頭しやすい。8月の相場は夏季休暇入りする市場参加者が多く、手控えムードも広がりやすいが、相場が薄いゆえに、早期利上げを連想させる材料が出れば急激にポンド高が進む可能性がある。特に、今月は英中銀(BOE)の四半期インフレ報告が発表される。ここで、英国の余剰生産能力の低下が示唆されれば、賃金上昇→物価上昇が連想され、早期利上げ観測が一気に強まる可能性がある。特に、英国の非伝統的金融政策の出口戦略の責任者となるシャフィク新副総裁が8月に就任する。金融政策委員会(MPC)の構成メンバーが6月以降に3人も入れ替わっていることとなり、金融政策決定時の投票バランスの変化への注目度は高まっている。そろそろ利上げを主張するメンバーが出てくる、との期待も市場に広がっており、MPC議事録の発表前後も、相場が大きく動く可能性がありそうだ。そうなれば、再び年初来高値(7/3、175.360円)更新も視野に入ってくる。

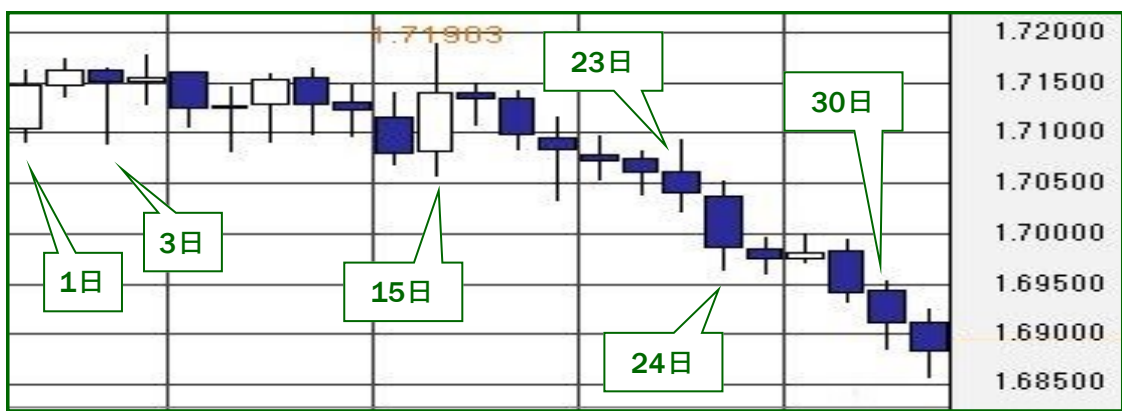
ただ、ウクライナやイスラエル、その他リスク要因について、目新しい報道があれば、反落する可能性がある事は意識しておきたい。(石川)

(予想レンジ: 171.000~176.000円)

ポンド/ドル 7月の推移

GBP/USD

7月のポンド/ドル相場は1.68560～1.71903ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約1.3%の下落(ポンド安・ドル高)となった。
 月前半は大きな方向感が出なかったが、後半に入ると、ウクライナ上空でマレーシア航空機が撃墜された事やイスラエルのガザ侵攻などを背景とするリスク要因や、米国の経済指標の好結果などを受けてドル高が全般的に進んだ中で、ポンド/ドルは軟化。6月に台頭した英国の早期利上げ観測を補強するような材料が英国サイドからあまり出てこなかった事も、ポンドの重石となったと見られる。



四本値	
OPEN	1.71050
HIGH	1.71903
LOW	1.68560
CLOSE	1.68842

1日	英6月PMI製造業が57.5と市場予想(56.8)を大幅に上回ったことを受け、ポンド/ドルは上昇した。
3日	米6月の失業率が2008年9月以来となる6.1%、非農業部門雇用者数は28.8万人増と、事前予想(6.3%、21.5万人増)より良好な結果となった事を受けてドル高・ポンド安が進行。しかし、欧州中銀(ECB)のドラギ総裁が「ユーロ圏経済のリスクは引き続き下向き」などと弱気な見方を示し、ユーロ/ポンドでユーロ安・ポンド高が進むと、ポンド/ドルはポンド買い優勢となり、下げ幅を圧縮した。
15日	英6月消費者物価指数が前年比+1.9%と市場予想(+1.6%)を大きく上回ると、ポンド/ドルは上昇。1.71903ドルまで値を伸ばした。
23日	英中銀(BOE)の金融政策委員会(MPC)議事録発表前に、「利上げに賛成したメンバーがいたのでは？」との観測からポンド買いが先行する様子も見られたが、発表された議事録では全会一致で金融政策が据え置かれたことが明らかになると、ポンドは失速した。ただし、その後地政学的リスクの一服感から主要国株価が堅調に推移していた事から、下げ幅を縮小した。
24日	英6月小売売上高が前月比-0.1%(除く自動車)と市場予想(+0.3%)に反して低下したことからポンドは下落。また、フランス・ドイツ・ユーロ圏の7月製造業PMIが市場予想を上回り、ユーロ/ポンドでユーロ高・ポンド安が進んだ事も、ポンド/ドルの重石となった。
30日	米4-6月期国内総生産(GDP)・速報値が前期比年率+4.0%と予想(+3.0%)を上回った上、前期分も上方修正(-2.9%→-2.1%)された事でドル高が進行。その後、米連邦公開市場委員会(FOMC)が政策金利の据え置きと量的緩和規模の100億ドル減額を発表。声明では「インフレ率は幾分、長期的目標に近づいた」「2%を下回るインフレ率が続く可能性は幾分低下した」「失業率は一段と低下したが、広範な労働市場の指標は労働資源の活用不足が著しい事を示唆している」「プロクサー・フィラデルフィア連銀総裁は低金利政策を『資産購入の終了後も相当な期間』維持する事が適切になると予測する指針について反対した」などとの文言があった。経済に対する強気な見方とプロクサー・フィラデルフィア連銀総裁の意見などを受けて、発表直後はドル高が進行。ただし、雇用に対するハト派的な見方から超低金利政策は長期にわたって継続すると看做され、ポンド/ドルは下げ幅をすぐに縮小した。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

GBP/USD

NYダウ平均

OPEN	16828.53
HIGH	17151.56
LOW	16563.30
CLOSE	16563.30

米10年債利回

OPEN	2.5268%
HIGH	2.6794%
LOW	2.4441%
CLOSE	2.5578%

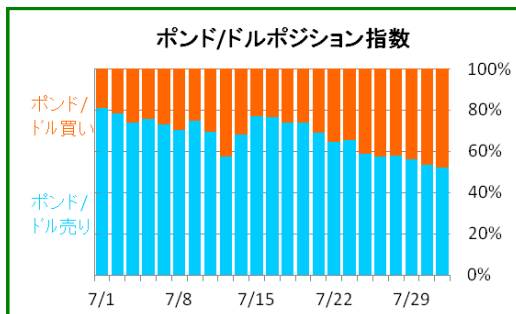
英10年債利回

OPEN	2.6770%
HIGH	2.7910%
LOW	2.5280%
CLOSE	2.6020%

7月のポジション動向

今月の注目ポイント

月間指標カレンダー(外部リンク)



- ・米7月雇用統計(1日)
- ・BOE金融政策発表(7日)
- ・英7月雇用統計(13日)
- ・英BOE四半期インフレ報告(13日)
- ・英第2四半期GDP・改定値(15日)
- ・英7月消費者物価指数(19日)
- ・BOE議事録(20日)
- ・ジャクソンホールでのイエレンFRB議長講演(21-23日)
- ・米第2四半期GDP・改定値(28日)
- ・米利上げ時期を巡る要人発言
- ・英利上げ時期を巡る要人発言

今月の見通し

7月の英国については、早期利上げ期待を煽る材料が乏しく、その前に膨らんでいた期待の反動で、ポンドを圧迫する結果となってしまった。一方、米国では7月末に発表された4-6月期GDP・速報値が好結果だったことから、ドル高が進んだ。これがポンド/ドルをダブルエンジンで押し下げる事となった。しかし、英国の利上げ期待はしっかりと残っており、材料さえ出れば再燃する可能性は高い。

8月の英国では英中銀(BOE)の四半期インフレ報告の発表が予定されている上、月初の時点でも「8月の金融政策委員会(MPC)では、利上げに投票するメンバーがいるのでは」との期待がある。実際にインフレ報告で余剰生産能力の低下を指摘する文言が入っていたり、MPC議事録で利上げに投票するメンバーが出始めるなど、早期利上げを連想させるような材料があれば、ポンドは急激に上昇を開始する事も想定しておくべきだろう。

ただし、米国についても、早期利上げに対する期待は強い。米国の景気、特に雇用関連指標に良好なものが目立てば、早期利上げ観測が強まり、ドル高が進む要因になる。8月のポンド/ドル相場は、「どちらがより利上げ期待を煽るか」の勝負になりそうだ。もっとも、イエレンFRB議長は基本的に長期金利を低く押さえたいとの意向が強い。あまりに利上げ期待が高まってしまうと、ジャクソンホールなどでハト派色をより強めた発言をし、市場の期待を抑えようとする可能性がある。そうなれば、一旦はドル売り優勢に振れるかもしれない。(石川)

(予想レンジ: 1.66000~1.73000ドル)